

踏み出す 勇氣

国際市民を育む英語教育

伝えたい。自分のこと。成田のこと。

日本の空の表玄関、成田空港が昭和53年に開港して以来、世界につながる国際空港都市として発展を続ける成田市。

年間約130万人の海外からの宿泊客や航空会社の乗務員が訪れ、3,000人を超す外国人が住んでいるこのまちでは、成田山の表参道や市内の大型商業施設を歩けば、外国人と頻繁にすれ違っています。

このような国際化の中で、皆さんの中にも外国人から道を尋ねられて、言いたいことが言えず、苦労した経験を持つ人もいらっしゃると思います。

また、もっと自分のこと、成田のことを外国人へ伝えたいと思い、英語に取り組んでいる人も多いと思います。

今回の特集では、主に小中学校で行われている英語教育を通じて、国際空港都市成田に身近な英語について考えていきたいと思います。



START OF ACTIVITIES

一歩前へ出る勇気

Where are you from? (どこの国から来ましたか)



参道を歩く外国人に手紙を渡し、その内容から話が発展していきます

成田市の公立の小学校における英語教育は、平成8年度に成田小学校が文部省(当時)の研究開発学校に指定されたことで幕を開けました。外国人と話してたくさんのお話を「知りたい」「伝えたい」。子どもたちはそれぞれの思いを胸に参道活動へ飛び出していました。

成田小学校が 研究開発学校に指定

「Excuse me. May I ask you some questions?」(すみません。ちょっと質問してもいいですか)

「Oh! No problem. Go ahead!」(構いませんよ。どうぞ)

立ち止まって話を聞いてくれる外国人に目を輝かす子どもたち。小学校5・6年生が友達同士でペアを組み、成田山の表参道で道行く外国人へ気軽に質問を投げ掛ける。今ではおなじみとなった成田小学校の参道活動の様子です。成田市の公立小学校における英

語教育は平成8年度、文部省から「小学校及び中学校における教育の連携を深める教育課程の研究開発」の学校に成田小学校が指定を受けたことから始まりました。この研究開発学校は平成4年度、大阪の2つの公立小学校への指定から始まったもので、県内では2校目でした。テーマは「地域社会に根ざした小学校英語学習」。1年生から6年生までの全学年でALT(英語指導助手)と担任とのチームティーチング(TT)、または日本人英語教師と担任とのTTで「聞く・話す」活動中心の英語学習を週2回・20分ずつという形で始めました。



箱の間を道路に見立てて、英語で道案内をする授業(平成9年)。現在は床にウレタンマットで道路を作り、案内もよりくわしく、実践的なものになりました。

**手探りの状態から
試行錯誤を繰り返す**

導入当初、英語教育の経験があつた先生はほとんどいませんでした。

年間指導計画も導入1年目は1年生から6年生まで同じもので、教材は先生たちが模造紙や厚紙を使った手作りですべてが手探りの状態でした。

「外国の人との会話の中でたくさんを知りたい、伝えたい、話したいという子どもたちの願いを踏まえて、毎週、次の週の指導案を綿密に作り上げていったのをよく覚えています」と当初の英語教材作りや指導案作りに携わった岡田芳一先生。

教材開発は日常生活でよく使われる言葉を中心に進められていきました。また、ただ単に英語が話せればよいのではなく、相手の目を見て会話する「アイコンタクト」やはっきり大きな声で話す「ラウドボイス」などコミュニケーション能力の育成に重点が置かれました。

桃太郎などの日本の昔話を外国人に伝えるスキット劇(寸劇)の授業では、脚本を考える上で、内容

をすべて英訳するのではなく、子どもたちが楽しみながら演じるにはどれくらい量が適当か、どこを発音させるか先生たちで議論を重ねたそうです。

導入当初の5年生の担任だった江村司先生(現成田小学校教頭)は「わたしたちも子どもたちも初めての試みだったこともあり、最初のころは授業をどのように進めていったらいいのか、試行錯誤の日でした。でも、わたしの授業中、学校を10数人の外国人が視察で訪れたとき、子どもたちが廊下に飛び出していき「ハロー！」などと、目を輝かせながらあいさつを何度もしていたのを今でも覚えています。英語の活動を通じて、外国人の人たちへ物おじしない積極的なコミュニケーションしようとする態度は、今の子どもたちにも受け継がれているようです」と当時の様子をこう振り返ります。

参道活動がスタート

そして冒頭の参道活動。今では物おじしない子どもたち。でも当初は違ったようです。

そのころ、4年生を受け持っていた岩崎元先生(現富里市教育委員会指導主事)は、1年間英語活

子どもたちの喜ぶ表情に成長を感じて

無理なく少しずつ英会話の幅を広げようという共通理解の下、同学年の担任の先生方と毎週、翌週の英語指導のミーティングを繰り返したことを覚えています。参道活動で子どもたちがにこにこしながら「自分たちの英語が外国の人に伝わった」と喜んでいる表情を見て、子どもたちの成長を感じ取ることができ、指導者として、とてもうれしかったです。



【吹き出しカード】

普通の授業では拡大したものを黒板に貼って練習に使われます。英語の文字は無く、吹き出しの中にバースデーケーキが描かれていれば、誕生日を尋ねるカード、国が描かれていれば、出身地を尋ねるカード。子どもたちは、自分の尋ねたいことを突然忘れてしまうこともあります。そんなときにこのカードを見れば尋ねたい会話を自然と思い出すことができます。会話の組み立てを考えるとときにも効果的。



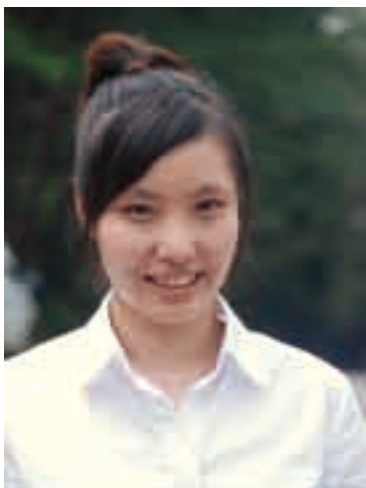
導入当初、教材開発に携わった
岡田 芳一先生(現橋賀台小教諭)



参道 Meeting Foreigners in English 活動を通じて

平成8年卒業
塚原 香菜さん

小学校の教員をしています。参道で外国の方に折り鶴を渡す授業があったのですが、皆さん快く受け取ってください、もっと自分や成田のことを話したいと思いました。わたしの勤務している学校でも英語の時間があるので、子どもたちに英語の楽しさが伝わるよう心掛けています。



互い Communicating in English の思いを伝え合う

平成8年卒業
大木 菜々子さん

小学校の教員をしています。参道活動で外国の方と触れ合って互いの思いを伝え合うことができたとき、とても温かい気持ちになりました。今でも外国の方とためらいなく接することができるのは、当時の経験が生きていると思います。



中学 I Want to Be an English Teacher 校で英語を教えたい

平成10年卒業
大場 祥孝さん

大学で英米語学科に在籍しています。英語を専門に勉強している今でも、振り返ると参道活動は小学校の英語活動の中でも最も有意義な授業だったと思います。将来は中学校で英語を教えたいです。



留学 I Want to Study Abroad もしてみたい

平成10年卒業
安藤 秀司さん

大学で機械工学を専攻しています。短期の留学も考えているので、その練習として英会話の授業も特別に受講していますが、小学校の当時覚えた言い回しは今も自然に口から出てきます。海外勤務のある職業についてもいよいよ英語の学習は継続していきたいです。

Let's play a game.
(ゲームをしましょう)

動を続けてきて、5年生になって初めて参道活動に出て行った子どもたちの様子を「校内では、ALTと活発に活動していた子どもたちがいざ参道に出てみると、一人目の外国人に声を掛けるのに尻込みしてしまい、なかなか声を掛けられず右往左往していました。

でも、その最初の一人に勇気を

出して声を掛けることができたとき、二人目からの外国人には積極的に声を掛けていきました」と振り返り「踏み出す勇気でこんなに変わるものだ」と子どもたちの成長を実感したそうです。

参道活動では「I am studying English」英語の勉強中です」と書いた名札や吹き出しカードなどを持たせたりして、子どもたちがス

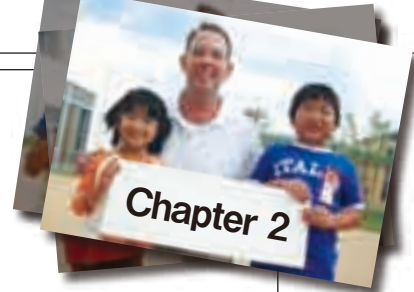
活動を広げて

ムーズに外国人との会話に入っていけるようにさまざまな工夫も考えられました。

その後、平成12年度からは、週に2回だった授業は毎日拡充され、平成15年度からは「小中学校の連携による実践的なコミュニケーション

ケーション能力を高める」をテーマに、小中学校9年間の英語科学習で効果的に確かな英語の力を身に付けるよう4年生以上で系統的に文字を導入した活動を取り入れています。

成田小学校で幕を開けたこれらの活動はその後の小中学校での実践的な英語教育にも波及していくこととなります。



通じる喜びを重ねて

研究開発学校での取り組みに続き、ほかの小学校にも英語活動が取り入れられていきました。

平成15年からは構造改革特別区域制度を活用して児童生徒の発達段階に応じながら英語によるコミュニケーション能力の育成を図っています。

研究開発学校以外にも活動を拡大

研究開発学校での英語教育の成果を踏まえ、そのほかの学校でも順次英語活動に取り組んでいきました。

小学校では、平成11年10月から2週間に1回、平成14年4月から週1回、同年10月からは週2回の英語活動を実施しました。

中台中学校区(中台中学校、新山・加良部・中台・向台小学校)では平成14年度からG・E・Lの推進地域として指定を受け、小学校で培われたコミュニケーション能力と積極性などの資質を中学校でも継続して育めるよう小中の連携を図っています。

構造改革特区制度を活用して

さらに、成田市が構造改革特別区域法により平成15年に内閣府から「国際教育推進特区」として認定を受けました。

小学校では外国人講師との体験的なコミュニケーション活動を実施することで、英語に慣れ親しみ、外国の人々に接し、相手を思いやり、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することを目標に「英語科」が開設されています。

3年生までは20分の英語科授業を週3回実施。4年生からは中学校での学習とのより効果的な連携を視野に入れ、45分を単位とした



担任の塚本崇先生、ALTのマグダリン石毛先生と一緒に楽しみながら英語を学ぶ豊住小学校の6年生



ケビン パーマーさん
(アメリカ出身)

成田に住んで1年半になりますが日本語が話せないで、保険の手続きや銀行口座を開くのに英語が通じなくて苦労したことを覚えています。市内の英会話学校で教えていますが、英語が上達するには、小さいころからゲームや踊りや音楽を通じて楽しく学ぶのが一番だと思います。

ゲームや踊りを通じて学ぶのが一番



ジェネット メラヤ
ベレーラさん
(スリランカ出身)

中央公民館の日本語ワールドで日本の文化や日本語を学んでいます。わたしはシンハリ語と英語を話しますが、来日当初は日本語が分からず、英語も通じず苦労しました。成田市では小学生のときから英語を学んでいるということで、多くの市民の人が英語を話すようになるといいですね。

英語を話す人が増えるといいですね

Are you ready? (用意はいいですか)

英語科授業を週1回、20分の授業を週2回、計3回実施しています。「中学1年生の1学期のころの子どもたちの様子をみると小学校で英語を学んできていたので、英語の音に対して抵抗が無く、大きな声で自信を持って話しています。小学校での英語活動が始まる前に比べ、中学1年生の段階から積極的に話そう、ALTの先生と話を続けよう、かかわろうとする生徒たちが増えていきます」と話すのは市の英語科年間指導計画の立案にも携わる西中学校の宇野直子先生。

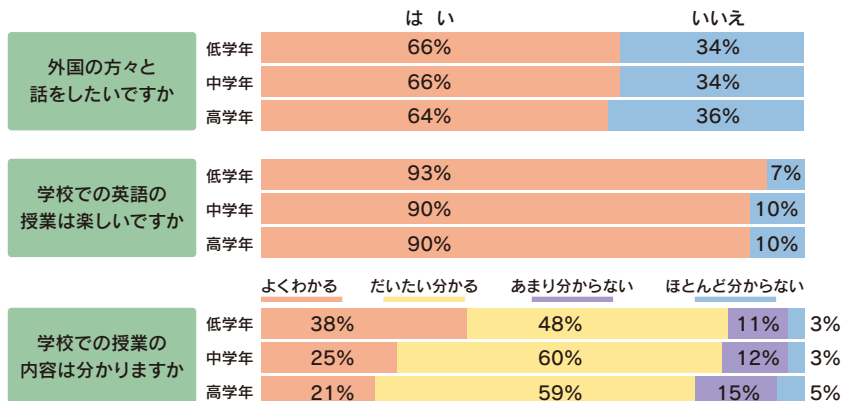
中学校では英語の授業を週3回から4回に拡充しています。従来の週3回の英語授業では教科書を中心とした授業を、週1回の特設の時間では小学校の英語活動を受け、「機能」「場面」を中心に指導計画が構成され、「聞く・話す」活動を重点に授業が行われています。また、すべての授業がALTとのチームティーチングで行われています。「英語という違う言葉を使うと普段おとなしい生徒も進んで授業に臨みます。子どもたちのプレゼンテーション能力は年々向上していると思います」。宇野先生とともに年間指導計画の立案に携わる同じく西中の並木直子先生は言います。単に単語を並べるだけの会話や文法的に間違った会話でも積極的に言葉を発して自分を表現する姿勢は、特区の英語教育がもたらした効果の一つのようです。

国際教育推進特区の進捗状況

- 平成15年度 1小学校で実施
- 平成16年度 1中学校と6小学校で実施
- 平成17年度 1中学校と8小学校で実施
- 平成18年度 2中学校と成田地区20小学校で実施
- 平成19年度 7中学校と成田地区21小学校で実施

*GEL...ゲイトウェイ・トゥ・イングリス・ランゲージの略。千葉県教育委員会と市教育委員会が中台中学校区を指定し、小・中・高を通じた英語学習の系統化、英語科授業を充実のための実践研究、一部の教科を英語によって行う教育に関する実践研究を行う。

英語の授業について (平成18年度市内の公立小学校に通う児童へのアンケート結果)





日本の伝統行事を紹介する英語をグループで考える西中学校の1年生

「小学校の学習でやってきたことをより発展させ、繰り返すことで定着を図っています。中学校の3年間は文字を含めて基礎をみっちり行い、難しい表現でなくいいから分かる表現の中で自分の言いたいことが言えるようになってもらいたい。そして、通じる喜びをたくさん経験して高校でのより発展した学習につなげていってほしい」と宇野先生。

中学3年の授業では総まとめとして、小中学校9年間に学んだ英語を基に、子どもたちが自分の言葉でお互いに特定の課題についてディベート(討論)する授業も行われています。将来的には、成田小学校などで行われている参道活動を発展した形で、中学校で体育館などに市内のA・L・Tに集まってもらい、自己紹介や日本文化の紹介、買い物体験などの多彩な活動を通じて、実践的な英語を身に付ける活動も検討されています。

成田小学校での英語教育が始まって10年。子どもたちはそれぞれの学校で、英語を通してコミュニケーション能力の向上と積極的な姿勢を培い、国際市民への第一歩を歩んでいます。



世界 Making Many Foreign Friends の国の人と友達に

西中学校1年
野本 大夢さん

小学校は話すことが中心でしたがその時学んだ発音が中学校での学習に役立っています。英語は世界の共通語なのでもっと練習していろいろな国の人と友達になりたい。



英国 I Want to See U.K. に行ってみよう

西中学校1年
清水 薫さん

小学校から英語をやってきて、外国の人が買い物をしているときの会話が少し分かるようになったのがよかったです。もっと英語を学んでハリー・ポッターの原作者が生まれ歴史もある英国に行ってみよう。



【イメージカード】

西中学校の3年の授業で使われているもの。動詞の使い方を視覚的にとらえることで、文法を学習する手助けになります。

国際交流活動を通じて実践的な英語力を

国際社会で活躍するためには、相手の国のことを知り、自分のことや自分が生まれ育ったまち、日本のことを自分の言葉で発信する力がますます重要になってきています。

このためには、小中学校での実践的な英語活動とともにさまざまな機会を利用して授業で身に付けた英語を使ってみるのが大切です。

市国際交流協会が行っている姉妹都市アメリカ・サンブルーノ市への中学生派遣事業もその一つです。



成田国際高校3年
石井 ひとみさん

* (社)成田青年会議所が行っている青少年健全育成事業「NARITA少年の翼」では、夏に市内に住む小学5年～中学2年生を海外に派遣しています。今年は24人がニュージーランド・フォクストンでホームステイを体験しました。くわしくは(社)成田青年会議所事務局(☎23-1900)へ。
※来年サンブルーノ市に派遣する中学生を本号32ページで募集しています。くわしくは市国際交流協会(☎23-3231)へ。

My Precious Memories ホストファミリーからいただいたアルバムが私の宝物です

「ホストファミリーが帰国の日に渡してくれたアルバムがわたしの宝物になりました」。アルバム内の写真を見ながら思い出を懐かしそうに話するのは、平成15年度に友好使節団の一人としてサンブルーノの派遣事業に参加した石井ひとみさん。現在、成田国際高校の3年生で英語科に在籍しています。

アルバムはファミリーが石井さんと過ごした楽しい思い出を写真に収め、コメントを添えて帰国時に渡してくれたもので、ぎっしり思い出が詰まったアルバムをわずかの時間で作って渡してくれたことにとても感動したそうです。ファミリーは個人的に空港まで見送りに来てくれて、石井さんは一緒にホームステイした友達と「わたしたち残ろう」と空港内で泣きじゃくったそうです。「滞在中はあまり英語が上手く話せず、ファミリーの話に相づちを打つていただけでした。帰国してもっと

もっと話したいと思ったことが、英語を続けようと思ったきっかけで、高校も英語科を選びました」と石井さん。高校では専攻の英語のほかに中国語も選択して「言葉はもちろん、中国の歴史や文化も学んで世界観が広がりました。物事を考える上で一方的に考えるのではなく、いろんな面から見る必要がある、自分の意見だけでなく相手の意見も尊重しなければならぬ」と考えるようになったそうです。そして「将来はNGOで海外で手助けするボランティア活動をしたい」「日本語教師になりたい」といろいろな夢を話してくれました。

まずは、大学に入ったら「NARITA少年の翼」に参加してチームリーダーとして活躍したいそうです。

中学 Experience Cultures and Customs Firsthand 生の柔らかな感性で文化や習慣を肌で感じてもらいたい

このプログラムは姉妹都市サンブルーノの家庭にホームステイすることで中学生の柔らかな感性でアメリカの文化・生活習慣を肌で感じてもらう国際理解の第一歩になることを願って行っているものです。実際、この体験が基になってさらなる人生のステップアップにつながりグローバルな視野を持つ青少年が育っていることをとてもうれしく思っています。



成田市国際交流協会
須堯 誠子さん

特区の授業をのぞいてみましょう

国際教育推進特区の小学校ではどのような授業が展開されているのでしょうか。9月下旬、平成小学校5年生の授業にお邪魔しました。

9月のテーマは「祭り」に出てくるさまざまな言葉を使って「みる」です。

歌やゲームを通じて 楽しみながら

Good morning! How are you?
(おはよう! みんな元気?) 今日も
元気なALTのセラ先生のあいさ
つで授業が始まりました。はじ
めはウォームアップのオリジナ
ルソングを全員で歌います。歌
の中にはportable shrine(みこ)
やcotton candy(綿あめ)など日本
のお祭りで使われる身近なものが
英語で次々に出てきます。子ども
たちの話す英語はセラ先生の言葉
を復唱しているせいも、自然な発
音です。これも英語を文字からで
はなく音声から学んでいる成果で
す。

続いて、担任の佐々木先生とセ
ラ先生の寸劇が始まります。佐々
木先生がちょうちんを指しながら
質問します。

Do you know what this is?(これは

は何か分かりますか?)

セラ先生が分からないと言つと
This is a Chouchin. It's a Japanese
lantern. Do you have lanterns in
your country?(ちょうちんといっ
て、日本のランタンです。あなた
の国にランタンはありますか?)
と会話が続きます。

寸劇が終わると先生たちの会話を
セラ先生の後に続いて復唱しま
す。そして、会話に出てきた単語
Japanese lantern(やちんちん)を



5年2組担任
佐々木 香代先生

自分も楽しみながら

毎時間の授業でわたし自身もALTの先生との会話やゲームを楽しんで行い、子どもたちが楽しく、落ち着いて英語の学習に取り組めるような雰囲気作りや言葉掛けをしています。授業の中で子どもたちの「英語って楽しい」「もっとやりたい」という前向きな気持ちや態度、表情を見たり感じたりすることができたとき、とてもうれしくなります。

楽しく英語を学んでいます

公民館サークルで英語学習

中央公民館を中心に趣味を同じくする市民の皆さんが自主的に活動している公民館サークルは現在市内で600を超えます。その中には英語を学習しようという意欲のある市民の皆さんのためのサークルもたくさんあります。

「スマイルイングリッシュ」もその一つ。講師は来日16年目、千葉英和高校でも授業をしているレイモンド A フリコ先生。日本語も堪能な先生は英語での説明で分からない部分は日本語で説明してくれるので、分からないまま終わらず、理解して授業を終えることができるそうです。「仕事で英語を使うので、自分の英語力を高めるため参加しています。先生の会話に出てきた言い回しを書き留めて、仕事やボランティアの際、役立たせています」と3年前から参加している牧野信子さん。皆さん、サークル名と同じく、楽しみながら英語に取り組んでいます。



笑顔が絶えないサークルです

公民館サークルとして、英語学習を目的に活動しているサークルは公民館ごとに計24団体あります。くわしい活動内容は市ホームページの生涯学習情報「成田市まなび&ボランティアサイト」(<http://www.genki365.com/narita>)をご覧ください。

各公民館の登録団体数

中央公民館(11)、公津公民館(1)、玉造公民館(2)、成田公民館(3)、八生公民館(1)、加良部公民館(4)、下総公民館(1)、大栄公民館(1)

※くわしくは中央公民館 ☎27-5911)へ。

Did you have fun?
(楽しかったですか)



ALT
島崎 セラ先生

子どもたち一人ひとりの良さを引き出していくためにはどうしたら良いかを配慮しながら授業の内容を考えています。また、担任の先生との会話のやりとりやゲームなどをわたし自身も楽しんでいます。子どもたちに異文化の良さを伝え、日本人としての誇りや相手を尊重することの大切さを感じてほしいと願っています。

一人ひとりの良さを引き出して

vegetable pancake(お好み焼き)やcandy apricot(あんずあめ)などに言い換えて、子どもたちが復唱します。このようにして身の回りにある日本語を英語で話せるようにします。続いて伝言ゲームが始まります。授業で学んだ祭りで使われる道具の中から選んだ単語を、先生がイラストを見せながら最初の子どもにもさざやきます。次々に単語を伝えていくゲームです。

最後にセラ先生が母国アメリカの祭りについて説明を始めます。Independence Day(独立記念日)やHalloween(ハロウィーン)など日本でもおなじみの祭りからFai(フェア)といったあまり知られていないものまで、写真やイラスト、時には動物の鳴きまねなどを交ぜながら楽しく説明します。子どもたちは先生の差し出す写真に興味津々。目を輝かせながら説明に聞き入っています。こうした活動が自国の文化と対比しながら外国の文化を理解し尊重する意識を育てることにつながっているようです。

※小中学校の英語教育についてくわしくは教育指導課 ☎20-1582)へ。



現在、市内の小中学校で教えているALTの皆さんと大須賀教育長に、成田の英語教育への思いを語ってもらいました。



オルビゴーツミキさん
フィリピン出身、平成15年からALTとして成田小学校に勤務。

子どもたちの創造力が楽しい

子どもたちにはアイコンタクト、ビッグスマイル、ラウドボイス、オープンマインドを常に心掛けるように話していて、教室の外でもそれを実践してくれています。

「子どもが好きだから英語を教えている」。そういうパッション(熱意)を持って授業をしています。授業の終わりには「よくやった。頑張った」とほめてあげるようにしています。わたしが一番楽しい授業はプレゼンテーションで、子どもたちはわたしの教えたパターンを使って、創造力を働かせて会話を続けます。また、わたしの国のことを話したりしますが、わたしが尋ねなくても自然に自分たちから日本のことや成田のことを話してくれるのがうれしいです。



イアンマクドネルさん
オーストラリア出身、平成16年からALTとして玉造中学校に勤務。

チームワークで教えています

玉造中学校で教えて4年目になります。4年前と比べると、入学してくる子どもたちの外国人と話す恥ずかしさが少なくなって、壁が薄くなっていると思います。

また、中学生のスピーチコンテストの審査員も務めています。市内から参加している中学生たちのスピーチのレベルが年々アップしているようです。今の3年生は1年生の時から教えているので、一番親しみがあがり、授業中遠慮なく「イアン先生、これは何ですか」と質問してきます。家の近くで子どもたちにラグビーを教えています。ラグビーと一緒に英語の授業も(日本人の英語の先生とALTとの)チームワークが大切です。



杉浦 テリー スウーさん
アメリカ出身、現在、市教育委員会主任ALT。平成14年から16年までALTとして成田小学校に勤務。

英語を教える熱意が大切です

成田小学校で1年生を教えています。子どもたちはいつも元気です。新しいことも一生懸命聞いて、大きな声で発音してくれました。6年生の授業ではピーチボーイ(桃太郎)の劇を英語でやりました。

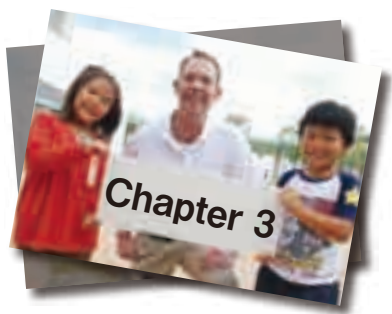
覚えることも多いし、せりふも少し長いので最初はちよつと心配でした。

でも、子どもたちは衣装や小道具を自分たちで作り、主演の桃太郎役の女の子も上手にできて、成田小にいた時の一番好きな思い出です。

いい英語の授業はALTと担任の先生の2人にパッション(熱意)がある授業だと思います。担任の先生は英語ができる、で

きないはあんまり関係ない。担任の先生の態度が大事です。英語はよくできないけど一生懸命やると子どもたちも先生と同じように一生懸命やります。もし「英語を間違えても大丈夫」という担任であれば、子どもたちも間違えることを怖がらず、英語を話します。ALTの先生も明るくて、担任の先生も一生懸命やればいい授業ができると思います。

世界にはいろいろな文化がありますが、さまざまな国でコミュニケーションの手段として英語が使われています。成田ではいろいろな国の出身者がALTとして教えています。子どもたちがいろいろな文化に触れることができ、いいことだと思います。



PASSION AND CHEERFULNESS

熱意と明るさを持って

世界で活躍できる基礎づくりを

世界に伸びていく
子どもたちを

わたし自身、外国に旅行して英語の発音が全く通じなかった経験があるので、成田小学校に赴任した時、子どもたちの発音を聞いて感動したのを覚えています。英語の授業のやり取りを見て、成田で実践している英語教育をさらに深めていくべきだなと感じました。そして、子どもたちが英語の基礎を学んで、世界の人たちと自由に話ができ、いろいろな国の文化を吸収して世界に伸びていく、そういう世界をつくりたいと思いました。

当時は先生方が一生懸命教材開発に取り組んでいたのですが、成田の子どもたちがこれから英語を学んでいく上で、それらを体系的にまとめることがわたしの在任中の課題だと思い、大学生やいろいろな人たちに協力してもらってきつちりとしたテキストや年間指導計画づくりに当たりました。大変でしたが魅力ある仕事でした。子どもたちと一緒に英語の授業を受けたりして大変楽しく4年間過ごすごうことができうれしかったです。

いい先生の条件は

性格が明るくて教えるのが好き

だというのは日本人でも外国の方でも、いい先生の条件として共通だと思っています。「教えるのが楽しい」「日本の子どもたちに英語を教えたい」「世界の文化を伝えたい」という先生を望んでいます。

皆さんには子どもたちが「あの先生の授業を受けると楽しいな」「先生も教えるのが楽しい」という授業をつくってほしいと思います。

担任の先生は英語があまり上手くなくても情熱と熱意を持つことが大切だというのは私も同感です。

その熱意が子どもたちを動かしていくんだと思います。

皆さんと一緒に授業づくりに励んだ、そういった熱意のある先生たちが今、下総や大栄の小学校でも中心になって英語の教育を進めています。

基礎づくりを成田で

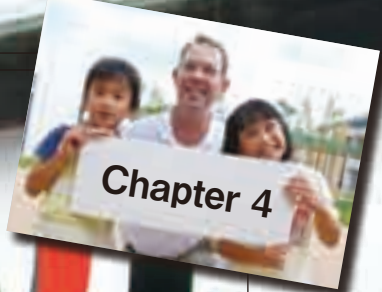
英語で意思疎通できる。それからいろいろな国の言葉を覚えて子どもたちが世界に巣立って活躍できるように、そういう基礎を成田の小中学校でつくってきたい。

また、英語を学んだ子どもたちが海外で活躍し、それぞれの国の役に立ってくれればと思っています。



大須賀 久大 教育長

平成11年から14年まで成田小学校校長、16年から現職。



Chapter 4

DREAMS COME TRUE

言葉に夢を託して



毎日 English on the Radio 聞き続けたラジオ講座が今に生きています

JALスカイサービス株式会社 松岡 憲一郎さん



航空機に搭乗されるさまざまなお客様の座席の調整を中心に搭乗手続きや搭乗のアナウンスなどもしています。英語を学習したきっかけは中学生のころ、近所に小中学生を対象にした国際交流サークルがあり、そこで自分の話す英語が通じて相手の話すことが少しですが分かったことがうれしくて、NHKのラジオ講座を聞き始めたことです。今、英語を使って仕事ができるのもこの講座を少しの時間ですが、毎日定期的に続けたのがよかったと思います。今は仕事で上手く言えなかったこと、分からなかったことを必ず辞書で確認しています。職場では英語は不可欠で海外勤務の可能性もありますので、英語をまだまだ鍛えていきたいです。

市内には仕事で英語を使って活躍している人がたくさんいます。そうした市民の皆さんに普段のお仕事、ご自身の英語との出会い、将来の夢などについてお伺いしました。



自分 Express my Thoughts in English の思いが伝えられないもどかしさがきっかけです

成田国際空港株式会社 加藤 優さん

国際業務室という部署で海外の空港管理会社との連絡調整や国際会議の運営に携わっています。中国や韓国の空港管理会社とのやりとりが多いのですが、使われる言葉は英語。電子メールも英語です。

英語を勉強したいと思ったきっかけは中学生のときに外国人と文通をする授業や外国人講師との会話の中で自分の思いが伝えられないもどかしさを感じたからです。高校生のときは海外に住んでいる日本人向けの英語ニュースをラジオで聞いていました。自分に身近な内容ということもあり、意味を類推するのに役立つように思います。これからは仕事で必要とされる英語力をもっと身に付けていきたいと思っています。



いろ Experience Different English Accents いろな国の人と話すことが聞き取りに役立ちました

全日本空輸株式会社 城山 奈央さん

空港のチェックインカウンターで搭乗手続きをしています。最近は乗り継ぎのために成田空港を利用されるお客様がかなり増えました。中国や韓国、ベトナムなどのお客様が多いのですが、その場合にも英語での対応がほとんどです。

英語は小学生のとき、母の友人に習ったのが初めて、ゲームをしたりして楽しい思い出ができました。高校3年間は語学学校に通い続けました。そこで、イギリスやオーストラリアをはじめいろいろな国の人と話す機会を得たことが、英語の聞き取り面でとても役立ったと思います。これからはお客様との会話の中で、さりげない一言などが添えられるような表現力を身に付けていきたいと思っています。



文通 Exchange Letters with Foreigners を続けて国や文化を知ることができました

国土交通省 松田 伸子さん

航空管制官として成田空港を離発着する航空機の管制業務をしています。中学2年のときに外国の人との文通を始めました。最初は辞書に出てくる例文や手紙の例文集をもとに単語を置き換えてのやりとりでしたが、次第に相手の国や文化の違いなどいろいろ分かってきて、10年近く文通が続いた人もいました。高校生のとき、カナダへ10カ月留学したことがあります。帰国してから高校の授業中、現地で耳にしたフレーズがたびたび出てきて学校の授業の大切さを再認識したことを覚えています。

職場では英語耳のいい人は皆、人とコミュニケーションを取るのが好きな人です。わたしもその姿勢を見習ってみたいです。

特集を終えて

今回の取材でお会いした皆さんにはご自身の英語体験について生き生きと

きとした表情で話していただき、私も元気をいただきました。きっとそれは、英語の学習で直接、人との触れ合いを通じて、相手に伝えたいのに伝えられないもどかしさ、それが伝わったときの喜びを積み重ねるといふ経験を皆さんがお持ちで、それを語ってくださったからだと思います。ご協力いただいた皆さん本当にありがとうございます。最後に国や宗教、文化の違いが人々と心の交流を進めていく際、「共通の言葉」の果たす役割に関して、今回の取材を通して最も印象に残っている成田小学校での作田博成先生(現八街市立朝陽小学校教頭)のエピソードを紹介してこの特集を閉じたいと思います。

「当時、外国のパイロットの方を学校に招いて子どもたちと会話を楽しんだり、交流する機会がありました。その後、その方がこのことに感動され、わざわざ両親といっしょに再度、学校を訪れてくれました。そして、「一緒にいらしたお父さんは、足が不自由なのにもかかわらず、その方の土地の踊りをお母さんの演奏に合わせて踊ってください、教室が割れんばかりの拍手に包まれました。本当の意味のコミュニケーションが成立した瞬間だと感じました」